

令和6年度 国際総合科学群教学 IR 実施報告書

1 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキング開催実績

- 第1回 令和6年6月10日
- 第2回 令和6年8月19日
- 第3回 令和6年12月23日
- 第4回 令和7年3月10日

2 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキングメンバー（敬称略）

ワーキング長	土屋 隆裕
国際教養学部	鈴木 伸治、阿内 春生、中西 正彦
国際商学部	和田 淳一郎、白石 小百合、杜 雪菲
理学部	佐藤 友美、大関 泰裕、北 幸海
データサイエンス学部	山崎 眞見、土屋 隆裕
事務局	小林学務・教務部長、高柴教育推進課長、大磯学術企画担当係長、 佐々木学術企画担当、佐藤学術企画担当、毛利学術企画担当

令和6年度 国際総合科学群教学 IR 検討ワーキング分析結果

1 入学から卒業後までのアンケートをつないだ経時的な分析

<取組概要>

平成30年度より「新入生アンケート（入学時実施）」、「カリキュラム評価アンケート（卒業時実施）」、「卒業生アンケート（卒後3年に実施）」の3つのアンケートに、本学の教育ポリシーに関する共通の設問※を設定し、回答結果の分析を行った。分析結果は各種会議で報告を行い、カリキュラム改善の検討を支援した。

また、分析を開始した平成30年度～令和2年度の入学者がすでに卒業しているため、新入生アンケート、カリキュラム評価アンケートの対象者を揃えたクロス集計を行い、経年での変化を分析した。

※「課題発見・問題解決力」「グローバルな視野」「豊かな教養」「確かな専門性」

(分析内容)

- (1) 各アンケートをつないだ経時分析（令和6年度実施の調査結果から分析）
- (2) 平成30年度～令和2年度入学者の入学時、卒業時アンケートの比較分析
- (3) グローバルな視野の詳細分析

<分析結果>

- (1) 過年度の分析結果含め、入学時には期待値が高いものの、卒業時の成長した実感と卒後3年時の役立っている実感は、徐々に下がっていく傾向が見られている。中でも「グローバルな視野」については、入学時の期待に比べて卒業時・卒後3年時の結果が大きく下がる傾向にある。

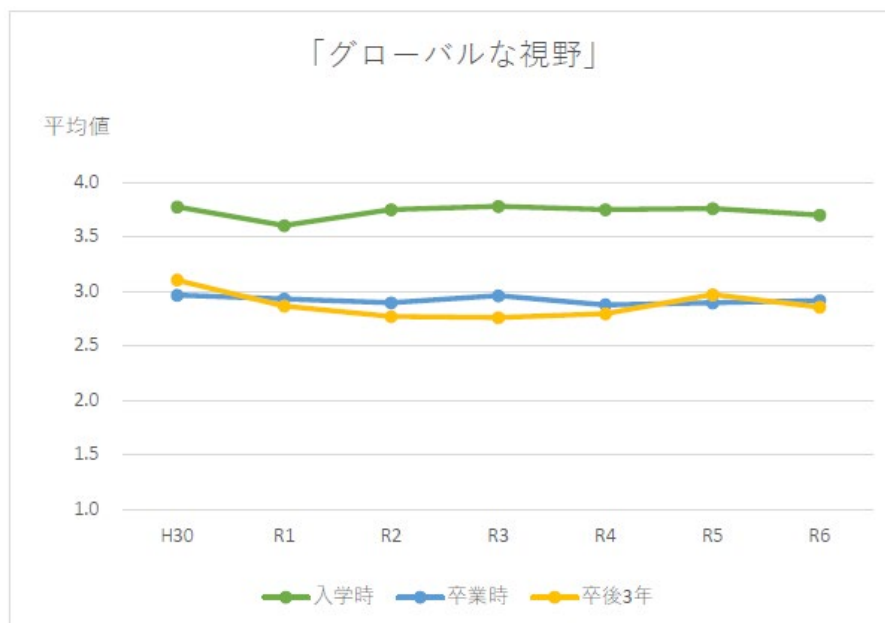


図1)「グローバルな視野」の経年比較

- (2) 平成 30 年度～令和 2 年度の入学者において、入学時と卒業時の回答をつないだ分析を行ったが、(1)での経時的な分析と同様の結果が得られた。

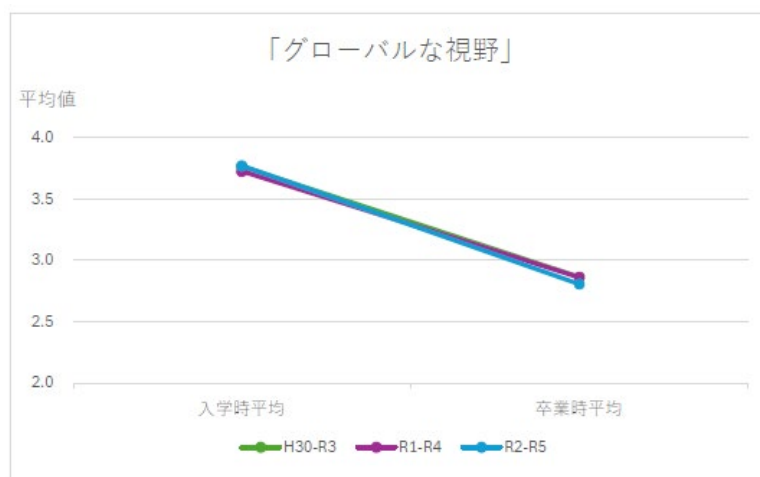


図 2) 同一対象をつないだ「グローバルな視野」の入学時・卒業時比較

- (3) 「グローバルな視野」についてさらに詳細な分析を行った結果、国際教養学部と国際商学部において、4年間で卒業した学生と比べ1年留年して卒業した学生の卒業時の値が高い傾向にあることが分かった。

また、上記結果を受けて、留学経験の有無との相関についての分析を行ったが、「グローバルな視野」の値と留学経験の相関は確認ができなかった。今回対象とした 2018～2020 年度入学者については、新型コロナウイルスの影響を大きく受けて留学経験が満足にできなかったこともあり、今回は十分な分析を行うことができなかった。2021 年度入学者からは、新型コロナウイルスの影響も減り留学プログラムへの参加者が急増するため、今後も分析を継続していきたい。

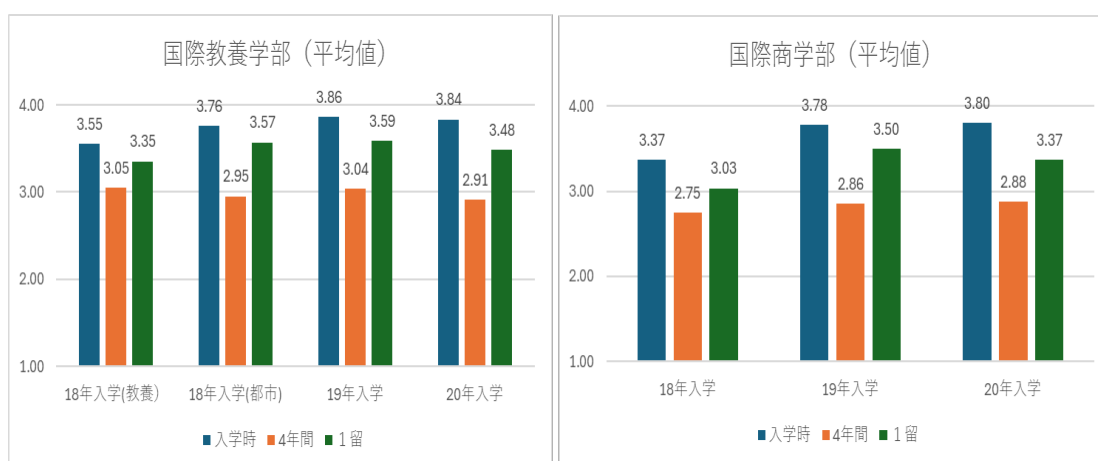


図 3) 「グローバルな視野」×卒業年別比較 (国際教養学部・国際商学部)

2 教学 IR 検討 WG における認証評価に向けた対応

＜取組概要＞ 教育の質の保証を行うために、特に重要項目と考える 3つの観点について、検討を進めた。教学 IR 検討 WG にて分析した結果を各学部会議で報告・共有し、

学部独自の課題の洗い出し、改善に向けた検討が進められた。

＜教学 IR 検討 WG で取り組む 3 つの観点＞

- (1) 「各授業の内容が授与する学位に相応しい水準となっていること」
- (2) 「成績評価や単位認定が厳格かつ客観的に行われていることの組織的確認」
- (3) 学修成果の可視化

(分析内容)

- (1) 授業外学修時間の推移

※授業評価アンケートにおける授業外学修時間の設問について、以下 6 段階の回答割合を集計分析

- ⑥ 4 時間以上、⑤ 3 時間以上 4 時間未満、④ 2 時間以上 3 時間未満、
③ 1 時間以上 2 時間未満、② 1 時間未満、① ほとんどしなかった

- (2) 令和 6 年度科目における成績評価に関する分析
- (3) 【YCU-Board ポートフォリオ機能】YCU 指標を用いた試行的な分析

＜分析結果＞

- (1) 大学設置基準の単位に関する条文「1 単位の授業科目を 45 時間の学習を必要とする内容をもって構成すること」を踏まえ、正規の授業時間に加えて、学生の授業外学修時間数の確認を行った。

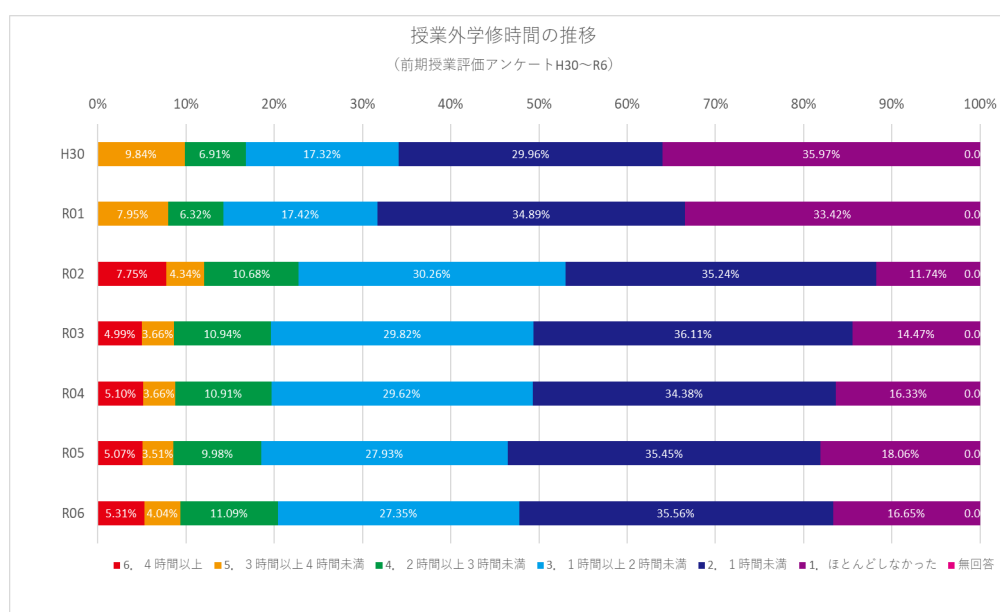


図 4) 授業外学修時間の推移

令和元年度から令和 2 年度にかけて、「③ 1 時間以上 2 時間未満」の回答割合が大きく増えていることで、授業外学修時間全体が増えており、令和 6 年度についても令和 2 年度と同様の傾向であった。しかし、令和 2 年度をピークに徐々に減少傾向ではあり、「② 1 時間未満」、「① ほとんどしなかった」の回答割合が増えていることが確認できた。(令和 2 年度比 5.2%増)

(2) 令和6年度の成績評価結果を分析し、成績評価が適切に行われているか確認を行った。

- ・分野別に GPA 平均値を集計し、GPA 平均値が高すぎるまたは低すぎる分野・科目の確認を各学部で行った。
- ・成績登録者数によって平均値に差が見られることから、成績登録者数と GPA 平均値を散布図にまとめ、評価が偏っている科目の確認を各学部で行った。
- ・各学期の集計結果だけでなく、経年変化の集計を詳細に行い、継続して成績評価が適切に実施できているか確認できるようにした。

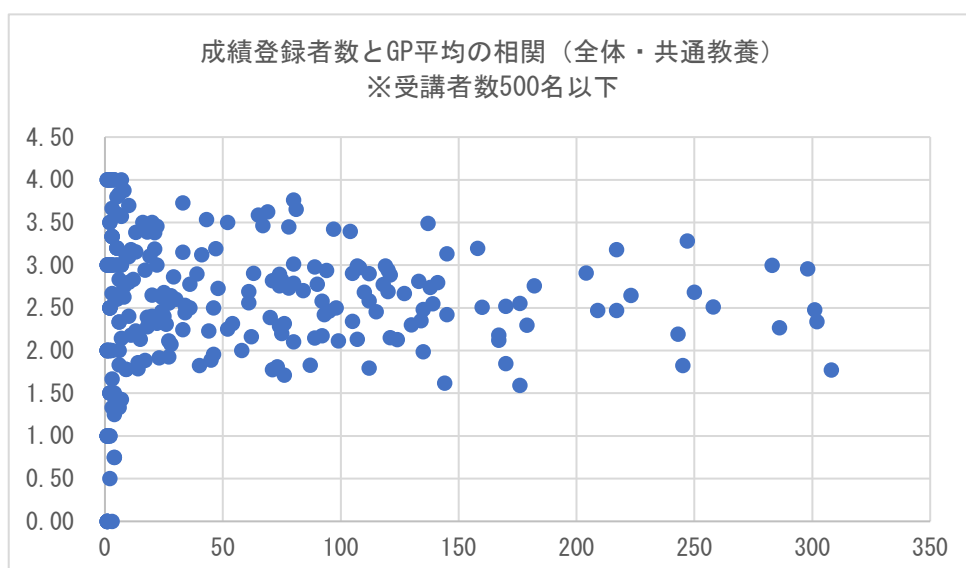


図5) 成績登録者数と GP 平均相関（共通教養科目）

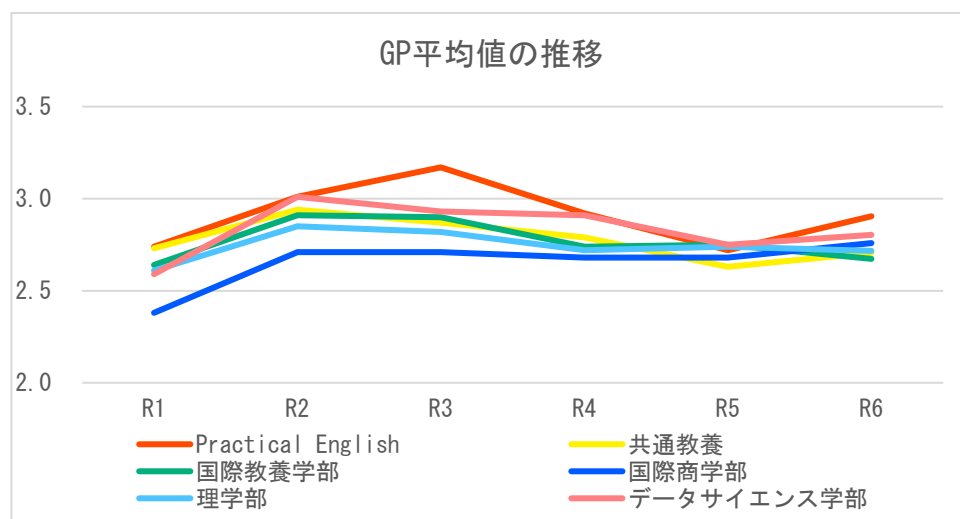


図6) GP 平均値（各学部・共通教養・Practical English）

(3) 令和4年度から導入した LMS（YCU-Board）ポートフォリオ機能「YCU 指標※」を用いた学修成果の分析について、以下2つの分析を昨年度から継続して試行的に実施した。

※本学の学修を通して備えるべき6つの学修成果項目「論理的思考」「情報リテラシー」「国際的視野」「資料作成力、プレゼンテーション」「地域貢献」「各学部独自項目」

(分析内容)

a 入試区分と YCU 指標（学修成果）の相関分析

b 留学経験と YCU 指標（学修成果）の相関分析

a、b ともに令和5年度4年次生の学修成果との掛け合わせを行い分析した。a では、推薦型選抜の学生、b では留学経験が有る学生の学修成果が高い傾向にあり、今後は学部毎の経年や該当区分の学生の志向・特徴の分析を進めていく。

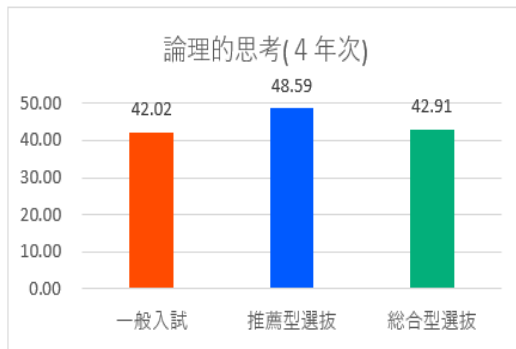


図 6) 入試区分による YCU 指標への影響

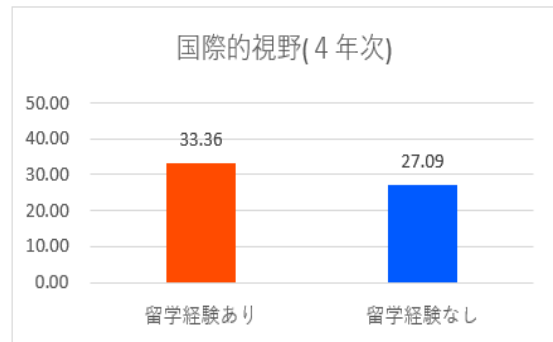


図 7) 留学経験による YCU 指標への影響

3 全国学生調査の実施及び分析

<取組概要>

全国学生調査は令和元年度から令和6年度までの計4回、試行で実施されており、令和6年度は当該年度調査の設計と実施、また本学の調査結果の集計を行った。調査の設計にあたっては、「教学 IR 学生プロジェクト」を発足し、学生が検討した本学独自設問の追加と、学生視点での調査結果の報告会を実施した。

なお、本学の調査結果と全国の大学との比較分析については、令和7年度に文部科学省から調査結果の公表が出次第着手する予定である。

(取組内容)

- (1) 令和6年度全国学生調査（第4回試行実施）の本学結果の集計
- (2) 「教学 IR 学生プロジェクト」による分析と報告

<分析結果>

- (1) 前回調査の分析結果により、全学的な課題として取り上げた項目について、本学の推移を確認した結果、インターンシップの満足度について改善が確認できた。
 - ・「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」
令和6年度：2.53、令和4年度：2.52
 - ・「ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある」
令和6年度：2.46、令和4年度：2.44
 - ・「インターンシップ（5日間以上）」（満足度）

令和6年度：3.36、令和4年度：3.05

(2) 以下の2つの目的・観点で学生が問を設定し、学生視点での分析を行った。

- ・講義形式による学習効果の差を明らかにすること
- ・学生の精神状態を把握し、環境改善の検討に資する情報を提供すること

講義形式によつての内容の理解度を問う設問では、対面講義を選ぶ学生の割合が5割以上となった。学年別に見ると、2年生が卒業年次生に比べて10ポイント以上対面形式と回答した割合が多かった。

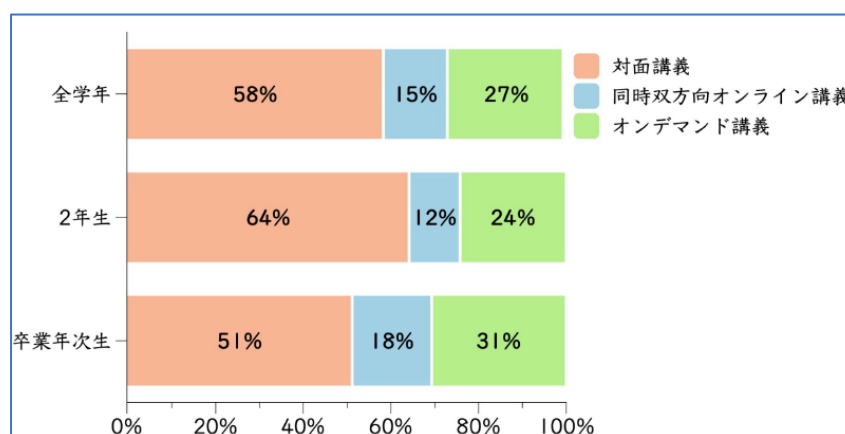


図8)「講義内容を理解できる」講義形式（学年別）

「孤独」と「精神的苦痛」の2つ精神状態に関する設問と全国学生調査の学修成果に関する設問の相関を確認した結果、「孤独」「精神的苦痛」いずれも精神状態が良い学生の方が成長を実感していることが確認できた。

専門分野に関する知識・理解			
孤独感指標	身についた	身につけていない	合計
4.00 - 8.00	92.96%	7.04%	71
8.00 - 12.00	88.86%	11.14%	709
12.00 - 16.00	84.08%	15.92%	201
合計	865	116	981

表1)「孤独」と学修成果の相関

専門分野に関する知識・理解			
K6点数	身についた	身につけていない	合計
0.00 - 12.00	89.7%	10.3%	864
12.00 - 24.00	76.92%	23.08%	117
合計	865	116	981

表2)「精神的苦痛」と学修成果の相関

4 分析結果の報告

各分析結果について各種会議にて報告・共有し、各学部におけるカリキュラム等の検証や改善を支援した。

<報告・共有した会議体>

- ・学長諮問会議（年1回）
- ・高等教育推進センター教学IR部門会議（年3回）
- ・各学部教授会（適宜）
- ・ICT推進委員会（年2回 ※データ活用推進部会として報告）

5 今後の課題

(1) 各学部研究科の自己点検評価・認証評価の支援のための教学 IR の推進

第4期大学機関別認証評価に向け、中央教育審議会大学分科会質保証システム部会「新たな時代を見据えた質保証システムの改善・充実について」の審議の結果、令和6年4月に認証評価に関する省令が改正され、「学修成果の把握と評価」という項目が大学評価基準に追加され、本学においても組織的な取り組みの実施と自己点検評価が必要となる。

また、令和7年2月に出された中央教育審議会「我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～（答申）」においては、今後の認証評価において、従来の機関別評価（大学の教育研究等の総合的な状況）ではなく、学部・研究科別の評価とすること、また、学生が在学中にどれくらい力を伸ばすことができたのか等を含む、教育の質を数段階で評価する新たな認証評価制度への移行という方向性が示されている。今後、各学部・研究科ではそれぞれの3ポリシーに基づいた教育の質保証が求められることとなる。

今年度の教学 IR 検討ワーキングでは、「学修成果の把握と評価」に関する取組の強化に加え、今後、学部・研究科での3ポリシーの点検に必要なデータ提供を行うための評価指標を検討するなど、モニタリング&レビュー設計の支援を行う。

(2) 学内収集データの把握、取得データの整理について

本学で実施しているアンケートは業務の必要性に基づいて各部署で実施されており、学生から取得しているデータの全体像が十分に把握されていない。また、取得データの活用という点でも、各部署での管理下におかれているため、横断的な分析や検討が進まない状況となっている。そのため、各部署が実施するアンケートや保持している情報の把握を進め、ダッシュボードの形式で相互に閲覧・活用できるよう整理を図る。